

## ゆうぐれに

村上 豊

友人が愚生に小さな小さな歌集を造ってくれるという。これは手紙の末尾に誌した拙歌を取っておいたとかで、歌集の題は何とつける。うーん、そうだな。「黄昏」がいい。

ということで、友人は年長の上、視力もおとろえているだろうと、ほんの少し造ってもらい、身辺の知人に笑覧を願うことにする。(諸賢に笑覧戴けず失礼しました。)

お礼の葉書に「黄昏の黄はどんな黄色ですか」はて？『色の手帳』の頁をくる。三百五十八色もあるのに判らないが、丁度その頃新聞の新刊書の広告に『日本の伝統色を愉しむ』をみつけてとりよせると、有り。

雀色時。昔から夕暮れは「雀色時」夕暮れの空は「雀色の空」などと表現された。と。

掌小歌集を造ってくれた友人が調べてくれて十二時<sup>じゅうにじしん</sup>辰の「戌時<sup>いぬのとき</sup>」を黄昏<sup>こうこん</sup>という。現在の午後七時、八時、九時に当る。

比喻として、「最盛期は過ぎたが、多少は余力があり、滅亡にはまだ早い状態」をいうらしいが、愚生は余力など無いものの、滅亡にはまだ早いと思って歌集名にしたのだ。

この友人が鎮西春江という方の歌集抄をわけてくれた。詩人まどみちお氏の実妹で沖縄県在住の九十八歳の方。まどみちお氏が百四歳の天寿を全うしているので、長命の家系と思われる。鎮西さんの『アセロラの実』から

一世紀近く生かされいまさらに言うべきでなき身の不調など

「多少は余力が」ある状態の、まさに黄昏時で現代の時間なら八時五十分頃か

階段の昇りは膝に障<sup>さや</sup>りなし「ワタシクダラナイヒト」降り難儀<sup>くだ</sup>す 宮 英子

(略) 正座したり、膝を曲げると痛みを発する。そして、上りより下りがつらい

(略) こうやって身体の不具合<sup>なだ</sup>を宥めているのだ。小高賢著『老いの歌』より

もう一首読もう

するすると夕闇くんだり見て居れば他人の老いはなめらかに来る 斉藤 史  
まさに「黄昏期」の力でないか。

これは黄昏期かどうか判らないが、シニカルな視方は黄昏期の特徴でもある  
ので？

<sup>うま</sup>旨みありて政権与党を捨て難し節操捨てて呑み込まれゆく 諏訪 兼位

朝日新聞歌壇。選者永田和宏氏は党名を明記しているが差し障り  
もあるので「平和の塔を公言する〇〇党がもう少し頑張るべきだ  
ったと」評言を書いている。

某党がアリアドネの赤い糸を出し某党受けて戦慄の恋 小野 長辰  
高野公彦氏選 迷宮脱出に用いた手口は、改憲せず憲法解釈で軍事行動を認  
めることだった。

日本の平和もいま黄昏期なのだろうか。

いまの若い世代、<sup>じゅうにじしん</sup>十二时辰なら<sup>たつとき</sup>辰時か<sup>みのとき</sup>巳時「<sup>しょくじ</sup>食事」か<sup>ぐちゅう</sup>「<sup>ぐちゅう</sup>隅中」現代なら午前  
七時か八時か九時頃の、歌を。

馬場あき子氏選一位

ジーパンで自転車をこぐモーツアルト見かけたソナタ九番の中 松田わこ  
評 モーツアルトを聴く中学生。楽想の中に現代のジーパン姿で自転車に乗  
る同世代をイメージする。

ちょっと異質な驚き。

確かに「えーっ!？」だ。ソナタ九番を聴いてみる。判らない。これは明け  
六つ過ぎと、暮六つ過ぎの違いだけではないようだ。

しかしモーツアルトはお洒落だったから、現代ならジーパンを穿くだろう。

筆者 橄欖同人